



日本帝国の終焉と東アジアの移住者たち：引き揚げと帰国のはざま

社会学およびその関連分野

研究者所属・職名：メディア・コミュニケーション研究院・教授

ふりがな ひょん むあん

氏名：玄 武岩

主な採択課題：

- [基盤研究\(B\)「親密圏と公共圏からみる〈日韓連帯〉の政治社会学」\(2022-2024\)](#)
- [基盤研究\(B\)「引き揚げと帰国のはざま－1950～1970年代における日本への帰還」\(2019-2021\)](#)
- [基盤研究\(C\)「森崎和江の越境する連帯の思想」\(2016-2018\)](#)

分野：社会学、歴史学

キーワード：帝国の終焉、引揚げ、帰国、帰国政策、ポストコロナル

課題

●なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

日本帝国の終焉にともなう中国、台湾、朝鮮半島、サハリンなど外地から日本本土への日本人の帰還において、終戦直後の「引き揚げ」と、1980年代以降の「帰国」は法制的に異なるにもかかわらず、両者を区別することなく使用してきた。「引き揚げ」の援護や「帰国」の支援から切り捨てられた人たちの様々な帰還体験を考察することによって、それらが歴史的・政治的・社会的な意味合いが異なる概念であることを示し、戦後日本において帰国政策が確立していく国策の転換過程を明らかにすることを目指した。

●研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

従来の枠組みに収まらない戦後日本の独特の移動の歴史を究明するには、新たな発想と資料の発掘が求められた。それに基づき、国民国家へと変貌する日本を目指して越境する人々を包摂/排除する戦後日本の社会的・文化的メカニズムを捉えるという、「引き揚げ」研究の新しい領域を開拓することに努めた。そのためには、戦前と戦後の連続性にも注目し、引揚者・帰国者と残留者の生活面へのアプローチを通して地域史と全体史の連結を試みる必要があった。

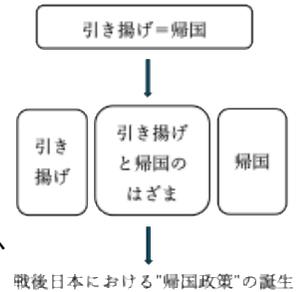


図1 課題の概念図



日本帝国の終焉と東アジアの移住者たち：引き揚げと帰国のはざま

社会学およびその関連分野

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

研究代表者の玄武岩は、外務省外交史料館所蔵『在韓困窮邦人（引揚等諸問題）』（2014-6035）を発掘して分析し、日本政府の戦後旧帝国領土に残された日本人の“帰国政策”において、どのような認識的な変化をともなって「引き揚げ」が「帰国」へと転換したのか、1969年に始まる在韓日本人女性に対する日本政府の公的帰国支援の考察をととして明らかにした。本研究をととして、「引き揚げ」と「帰国」およびその国策の転換過程を検討した結果、戦後日本において“帰国政策”が誕生する際の政治的メカニズムの一端が見えてきた。さらに、国民国家へと変貌する日本を目指して越境する人々を包摂／排除する政治的・社会的メカニズムが明らかになった。

本共同研究の各メンバーがそれぞれ専門とするフィールドを中心に、1950～1970年代における中国、台湾、朝鮮半島、サハリンから日本への「引き揚げと帰国のはざま」における移動に関する文献調査および歴史的事実の解明に取りかかった。その成果として、Svetlana Paichadze, Jonathan Bull (eds.), *End of Empire Migrants in East Asia: Repatriates, Returnees and Finding Home* (Routledge, 2023) を出版した。本書は英文で執筆したもので、本研究を諸外国に向けて発信するうえでも有意義な成果といえる。

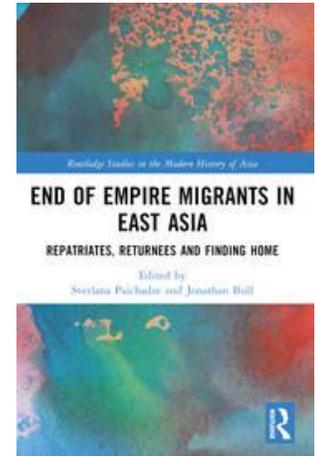


図2 研究の成果物

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

本研究をととして見えてきたことは、戦後日本における外地から内地への移動・定住・帰国に関する歴史的事実の解明は、帝国主義と植民地主義に階級やジェンダーの桎梏が絡んで家族関係をゆがめた日本帝国の支配秩序全般を視野に入れなければならないということだ。こうした知見は、中国、台湾、朝鮮半島、サハリンなど引き揚げた地域の領域を越えて、グローバルな視座から引き揚げという歴史経験を浮き彫りにし、専門とする地域が異なる研究者や一般の人びとがこの問題について理解を深めるうえで大きな助けとなる。